

蟠桃論再考

——いわゆる蟠桃論の「矛盾・二重性」について——

松村 浩二

蟠桃論をめぐる問題のひとつに思想の「矛盾・二重性」がある。すなわち、「無鬼論」に代表されるような合理主義、啓蒙主義、そして唯物論的思考を有しながらも「封建性」、「儒学的倫理思想」、「農本主義」が残るのはなぜかという問題がそれである。このような問題は、蟠桃の「合理的的精神・唯物論的思考」のみを抽出して過大に評価するだけの研究には起こらない。しかしながら、蟠桃論を展開する研究にとつては両者の思想的関連は解明すべき重要な問題となる。ところで、この「矛盾」をめぐる問題は、まず近世における評価すべき点として、蟠桃の「近代性・革新性」が発見された後に生じるものである。したがって、無前提に「近代性・革新性」というステレオタイプ化された規定に基づく従来の蟠桃論のほとんどは、この「矛

盾」の解明を志向することを自明の問題提起としている。そしてその解明の方法は多様である。たとえば、蟠桃をめぐる歴史的社会的な状況を分析して、その内部における蟠桃の社会的位置にその「矛盾」を還元したり、その「矛盾」の根底にある首尾一貫した思考方法を再構成することで、蟠桃論の統一的な理解を可能にするといったものがある。しかしながら、以上述べてきたような「矛盾」論の解明の作業に加担するといったことは本稿ではしない。むしろ、従来の蟠桃論の基軸とも言うべき「矛盾」論を規定している認識論的な枠組みを明るみに出す必要がある。

(1) 「蟠桃」論ということ

従来の蟠桃研究は、あくまでも「蟠桃」論研究であつ

た。ここでいう「蟠桃」論という問題設定は、いうまでもなく、ある事柄を自明な前提として成立する。すなわち、蟠桃という一つの「思想主体」がそれである。「蟠桃」論の研究者の視線は、ここでは代表的なテキスト『夢ノ代』の記述を越えて、テキストの「著者」としての蟠桃という「主体」に注がれる。結果的に、「合理主義者・啓蒙主義者・無神論者・唯物論者」といった肯定的な規定や、逆に「大商人イデオログ・封建主義者・鎖国論者」といった否定的な規定が蟠桃をめぐって反復的に再生産されていくのである。しかも、この「規定」という作業の過程において、『夢ノ代』テキストは著者蟠桃の「意図・動機・思考方法」などが再構成されるうえでの媒介とされ、ひるがえって『夢ノ代』テキストの全記述が、そしてその記述を規定する「知」のありようが、再構成された「蟠桃の思想」の内部に囲いこまれてしまうことになる。

(2) 「近代性」ということ

従来の「蟠桃」論研究はまた、近代的規範を規準とした価値判断でもあった。全てのといってもよい「蟠桃」論には「合理性・科学性・啓蒙性」といった言辭が「重要・優秀・卓拔さ」といった価値づけをとまなう。すなわち、こ

のような価値づけが「近代的規範」の発見にとまなうのは、近代の視線が蟠桃の『夢ノ代』といった近世のテキストに「近代の萌芽」、いしかえるならば「近代の自己像」を見いだしているからにはほかならない。蟠桃論においては「合理主義・科学性・唯物論的性格」といった多様な言辭にもかかわらず、「近代的規範」を規準にして『夢ノ代』テキストから抽出された「近代性」によって「蟠桃像」が再構成されてきたのである。

たとえば、本稿で取り上げる「天文・地理」に関する記述はそのような「近代的」な解釈の典型的な対象と見なされてきた。つまり、一八世紀・一九世紀の「天文地理」は、近代天文学と近代地理学といったそれぞれの学問領域から、近世日本における近代的「天文」学と近代的「地理」学の萌芽としてのみ発見されてきたのである。「天文」学の分野では、近代性の象徴として、「地動説」や「太陽暦」があげられ、その中で『夢ノ代』テキストは本木良永、志筑忠雄らの説を司馬江漢と同様に継承、普及したものと見なされている。また、「地理」学の分野では、新井白石に始まる、近世鎖国体制下における「世界地理」として高く評価される一方で、西洋植民地主義への危機意識の反映、すなわち対外認識を深めるための「世界地理」であった

とする両極端な解釈を施されている。後者については、とりわけ戦前、戦中期の研究で拡大解釈的に高唱されたのち、戦後になって低調となったが、前者については、今もなお「日本地理学史」や「蘭学史・実学史」といった研究領域で継承され通説として共有されている感がある。しかしながら、くりかえし述べるように、『夢ノ代』の「天文・地理」の記述が、あくまでも近世日本における「近代文学・近代地理学」の生成過程という単線的な歴史ストーリーの内部に閉じ込められることによって、「近代合理主義」のテキストとして評価されてきたことは再検討すべき問題である。

(3) 「近代性」から「矛盾」論へ

「蟠桃」論が近代の自己像の発見に止まるかぎり、その議論は楽観的に展開する。しかしながら、いったん近代的規範の障害物にでくわすと、「蟠桃」論はひとつのアポリアにつきあたる。先述した「農本主義・儒教的倫理」といった思考様式がそれである。そしてこのアポリアこそが蟠桃の思想の「矛盾性・二面性」という問題として説明すべきものとなる。ところで、思想の矛盾がアポリアとして問題化されるのは、「無矛盾」的な一貫した思想構造を有する

「近代的主体」を前提にした場合であろう。この前提にたてば、「矛盾」の正の側面⇨「近代性」は無条件に不問にされ、その一方で「矛盾」の負の側面⇨「農本主義・儒教的倫理」といった諸点が、様々なコンテキストの中で恣意的な解釈を施されて、理解可能なものとされていくことになる。たとえば、蟠桃の思想を規定する社会経済的な土台、その内部における蟠桃の位置を明らかにして、「大商人イデオログ」といった蟠桃像を再構成すること。(永田広志、三枝博音、土屋喬雄、ねずまさし)また、「矛盾」の両側面を対立的に見るのでなく、それらを根底において根拠づけている「儒学の枠内」にある「思想構造」を再構成すること。(上杉允彦)あるいは、単純に当時の近代西洋科学の受容パターン、後の佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」に代表される二重構造的な思惟様式に還元すること。このようにして、多様なコンテキストの中で蟠桃の思想の「矛盾」が理解可能なものとして解釈を施されていくのである。

(4) 新たな「蟠桃論」の方法的課題

本論文においては、従来の研究の枠組み、すなわち蟠桃という「思想主体」を前提にすることで「近代」の認識

論的地平から「蟠桃像」を再構成的に記述することはしない。くりかえすならば、「合理性・科学性」あるいは「唯物論的性格」といった「近代的概念」を、『夢ノ代』テキストの中に探り、ひるがえってそれらの概念によって蟠桃を「合理主義者・唯物論者」と規定づけたり、逆にいわゆる「矛盾」の負の側面から「大商人イデオログ」といった「蟠桃像」を再構成することはない。やるべきはそういう従来の研究の枠組みをカッコ入れすることである。まず、「蟠桃」という思想主体を想定せず、『夢ノ代』テキストをそれにとつてかえる。視線は、『夢ノ代』テキストへと主として注がれる。したがって、「蟠桃」の思想構造や思考様式を再構成したり、それらの「起源・由来」を「西洋科学・懷徳堂の学問・高利貸資本としての経験・大商人の経済的条件」などに追及することはもはや主要な問題関心ではなくなる。つまり、「蟠桃像」を再構成する過程で「矛盾」につきあたり、その「矛盾」解明の作業に加担することは必ずしも必要でなくなるのである。次に、「合理性・科学性・唯物論」といった近代的概念によって、「蟠桃像」に価値的な規定をあたえることはさける。つまり、近代性を価値基準として西洋近代科学の「影

響」や近世日本における近代性の「起源・萌芽」を確認する作業は『夢ノ代』テキストを読むうえでもはや主題ではなくなる。むしろ、それに代わって主題とすべきは、『夢ノ代』テキストの記述から読み取りうる知的レベルにおける転換、すなわち『夢ノ代』テキストによって開かれた知の地平の再検討である。具体的に言えば、従来の「近代規範」から『夢ノ代』を解釈して蟠桃論を構成したり、近代へと至る歴史ストーリーに『夢ノ代』を閉じ込めるのでもなく、一八世紀から一九世紀の同時代のテキスト群のなかに『夢ノ代』を投げ入れて、そこに貫通する問題構成の様式あるいはそれらの差異の検討によって、一八・一九世紀の境界において成立していく「知」の位相を明らかにする。とりわけ「蘭学史」の領域における蟠桃論に顕著な「近代性」をめぐる問題設定が、いわば一八・一九世紀の「蘭学」的言説にいかにしてその根拠を見いだしているか。いいかえるならば、従来の「蘭学史」研究を規定するような「近代的」な認識論的枠組みが成立していく過程を批判的に再検討していくことが主要な問題となる。そしてまた、「近代合理主義」と同一視される西洋の「天文・地理・医学」の言説を受容する過程で、それらの知的レベルにおける「正しき」を承認しながらも、なおか

つそれとは一定の距離を保ち不斷にズレていく知的位相をテキスト『夢ノ代』をはじめとする一八・一九世紀のテキスト群を通じて明らかにする。

第一章 「天文」をめぐる言説

『夢ノ代』『天文編』の記述に直接的、間接的に言及した論文としては、板澤武雄「江戸時代に於ける地動説の展開とその反動」(『史学雑誌』の1)、有坂隆道「地動説伝来と新宇宙論の展開」(『日本史の研究』所収)、阿部真琴「科学的宇宙観」(『日本思想史の研究』所収)をはじめ、東洋の科学史研究や蘭学史研究で数多くあげることができた。しかし、くりかえすように、これらの研究視角は、多かれ少なかれ「近代的宇宙観」の象徴としての「地動説」の史的展開過程を、本木良永―志筑忠雄―司馬江漢―山片蟠桃といった人的影響関係に解消したり、そうでなければ特異な「宇宙論」を蟠桃の「独創性」(有坂)に還元したりするものである。結論的には、蟠桃は「地動説」の媒介者(板澤)、あるいは近代的な「観測天文学」へと充分には展開しなかった「不測天文学」にとどまった(末中)とされる。しかしいずれにせよ、そこには「近代的科学」と「近代的

主体」という自明な前提があるということに変わりはない。

一八世紀後期から『夢ノ代』成稿年、1820(文政2年)までの西洋天文書について言及したテキストをここで列挙しておく。はやくは向井玄升の「乾坤辨説」(1699、万治2年)や西川如見の「天文義論」(1712、正徳2年)がある。そして、「地動説」の紹介書として、本木良永の「新制天地二球用法記」(1792、寛政4年)があり、その継承として志筑忠雄の「曆象新書」(1802、享和2年)がある。そして蟠桃とよく比較される司馬江漢の「地動説」にふれたテキストはこの間にかかっている。たとえば、『和蘭天説』(1796、寛政8年)、『刻白爾天文圖解』(1808、文化5年)、『春波樓筆記』(1811、文化8年)、『天地理談』(1816、文化13年)などがそれである。このような「天文」をめぐるテキスト群をふまえて『夢ノ代』『天文編』が書かれたことは、引用文献目録や本文の記述からも明らかである。したがって問題とすべきなのは以下のことである。すなわち、西洋天文学の言説がいかにして発見されたのか、その発見によって従来の「天文」をめぐる言説にいかなる新たな視線が注がれ始めたのか、その過程において、いかなる知的な枠組みが解体され、そしてまたいかなる知的枠組

みが構成されていったのか。

第一節 既存の和漢天文言説の知的位相

(1) 吉凶禍福的「天文」の解体

『夢ノ代』『天文編』をよんで明らかなのはまず、「天」が吉凶禍福や祈禱・呪術・占星術といった「非合理」なるものから切り離されていることである。履軒の「華胥曆」によるとしながらも、

十方暮・八專の如きは、皆無稽の談なり。天は唯運動するのみ。陰晴風雷は、是れ氣の聚散変化、豈端倪すべけんや。(154)

すべて干支日の善悪、方隅の吉凶、天の知らざる処なり。なんぞ煩しく天これを賞罰せん。(168)

と述べられる。ここで否定されるのは曆による晴雨の予見である。もはや「天」は「運動」する物でしかない。また、人間の道德行為が天の賞罰と不可避的に結び付くといった、福善禍淫の論理は否定される。このような「天文」と吉凶占いとの知的連関は『夢ノ代』『天文編』の至るところで反復される。たとえば、「無用の五行」による「祥瑞妖ゲツ」(150)、「雨を禱ること」の「無益さ」(169)、

「天火・風雲・天変の類、人間の吉凶にあづかることなし。」(170)、「近世までも彗星は猶凶としたり」(179)、「雷の人を殺す、なんぞその人の善悪にかかわらん。」(180)このような吉凶を主とする天人相関的な天文の言説は、曆を五行概念による複雑な占いの言語でからめとり、「世俗の惑」となる。したがって、吉凶を語ることを止め「人心を惑ふ所」(154)ないようにするというのである。

(2) 仏教・国学的「天文」言説の解体——「妄説」としての既存の天文言説

従来の仏教の須弥山説・国学の宇宙生成論そしてまた民俗的な宇宙観や曆などは、すべて「文盲・愚・妄説」(191, 196, 197)といった批判の言辞の対象となっている。それらの「天文」の言説はすべて、「渾天・地球」(198)に象徴される天文学が未発達であったが故であり、天地怪異を記した独断的なものであったとされる。

天竺ノ須弥山ノ説、日本ノ神代ノ卷ノ説ヨリ漢土ノ諸説ハ、ミナ天文ノ関ケザル前ニシテ、居ナガラ天地ヲ測ルモノナリ。知ルベシ、其邦ノ目ノ及ブ所ノミニシテ、管ヲ以テ天ヲ窺フガゴトクナルコトヲ。(198)

まだ「天文学」の発達しなかつた時代の産物として、従来

の天文の言説はあるのであり、それらはすべて「居ながら」、つまりその閉じられた内部の知的空間からのみ、「天文」を語ることでできたのである。したがって、一八世紀近世日本の知的基盤ともいふべき様々な博学的テキスト（三才図会、訓蒙図彙など）もまた、「天文」に関しては、「公論」としての性格を剥奪され、「詐欺・虚妄」(108)と見なされることになる。このように、仏教・国学的な天文の言説を批判することで行われるのは、「和漢」という閉じられた空間の内部から「天文」に投げかけられた言説の有する独断性ともいふべき特質である。

第二節 西洋天文学の優越性の知的位相——「真理」

としての新たな天文言説

先に見てきたように、『夢ノ代』『天文編』では、従来の和漢の天文の言説が、虚妄なるものとして批判されていた。それは、陰陽五行概念による複雑極まる吉凶禍福の占いのためであり、また和漢という閉じられた内部空間からのみ見られ語られることで構成された「独断」的な言説であるが故であった。しかしながら、注意すべきなのは、このような和漢の天文言説は、「他者」としての西洋の天文

言説の側に立ってはじめて見られうるのであり、既存の天文をめぐる空間認識の様式の外部に立つことで発見された、「自己」の批判すべき空間認識の様式として立ち現れたということである。では、自らの空間認識の様式を批判しうる立場としての、いわば「外部」としての西洋の天文言説はいかにして見いだされ発見されているのだろうか。

(1) 〈実見〉、〈実地〉に裏づけられた知としての「西

洋天文学

『夢ノ代』『天文編』では、同時代の蘭学のテキストと同様に、西洋の科学的知を和漢のそれより優秀なものとして規定している。従来、このような西洋科学と和漢の観念的な知的体系との優劣関係は、「合理主義」か否かという基準に基づいて構成されてきた。すなわち、西洋科学の「優越性・優越性」が「合理主義」という概念と透明に結び付けられることで解釈されてきたのである。先にも述べたように、このような解釈では「合理主義」それ自身が不問に付されてしまい解釈は近代的「合理主義」の再生産の作業でしかなくなる。問題は、「合理主義」という規定を呼び寄せる『夢ノ代』テキストの中の記述の再検討である。

では具体的にみていく。「天文編」の後半に主として西洋天文学への言及がみられる。そこでは、西洋科学は確かに和漢の知的体系に優越するものとして捉らえられている。

西洋欧羅巴ノ国々ニヲヒテ、ソノ実地ヲ踏ザレバ、凶セズイハズ。天文ノゴトキハ、海外諸国ニ往来シ測量試識シテコレヲ云。ユヘニ大舶ヲ鑿シテ万国に抵リ、天文地理ヲ正ス事ナリ。ユヘニ梵・漢・我邦ノゴトキ虚妄ノ説ハアルコトナキ也。ココヲ以テソノ説ヲ信ズベシ。又其学ニ精シキコトハ、極メ尽サザレバ措ザル也。(198)

欧羅巴ノ天学ニ精シキコト、古今万国ニ類ナシ。殊ニ万国ヲ廻視シテ、ミナ実見ヲ以テ發明スルコトニシテ、誰カコレニ敵セン。ソノ上「ホウレン」国ニ「ヘイコツホハーリン」ト云人、地動儀ノ説ヲ盛ニス。……今ニテモ欧羅巴人ハ大船ニノリテ地球ヲ巡リ、ソノ知ラざる所ヲ發明スルコト、万国ノ及ブ所ニアラザレバ、……必シモ西洋ノ術ヲ疑フ事ナカレ。アツク信ジテ従フベキモノナリ。ユエニ梵・漢・我邦ノ井蛙ノ愚術ヲ出シ、総ルニ西洋地動ノ術ヲ示シテコレヲ証シ、愚蒙ノ人ヲサトスノミ。(201)

閉じられた当の空間から「虚妄」な言説を天地に投げかける和漢の知的なありかたとは異なり、西洋は「海外・万国」を往来して、「実見・実地」による「測量・試識」によつて「天文地理」を图示し、記述するというその点においてこそ、和漢に勝るといふのである。したがつて、「地動説」を説いたから「合理主義」ではなく、「実見・実地」に支えられてはじめて記述されるからこそ、西洋の「天文地理」は「正しい」知として見いだされているのである。このような実際に目で見たことを記述しているから西洋的知が「正しい」、あるいはより（真理）に近いといった認識は一八世紀後期から一九世紀にわたつて「天文・地理・医学」といった言説領域において広く共有されてきたものとみることが出来る。閉じられた和漢の「タブロー」から、あるいは神代のテキストからこの「世界」を見ることの不毛さが、「視覚的明証性」のみに（真理）の基盤を置くという西洋的知の認識様式の発見によつて語られていくのである。

(2) 計測、計器による照合Ⅱ「正しさ」の確証と細密化。数量化された天文

生身のこの目で見るものが「正しさ」の根拠とされる

ような西洋天文の知は、同時にその「正しさ」を「天文地理」空間を、絶え間なく数量化し分節化して、さらに様々な「計算法」と「計測器」によって不断に照合してより精密な数値を割り出していく。その数値とは、たとえば経緯線であり、地球をはじめとする自転、公転の周期、日数、惑星間や太陽からの距離などである。確かに、そういった数値は、主として『曆象新書』『天地二球用法記』などの西洋天文学の訳書によったものであろうが、その数値による天文の言説もまた、和漢の天文言説には希薄なものであった。徼私東太陽明界図(ウインストン)の各惑星の公転周期と太陽からの距離を詳述した箇所を引用したのち、「地動説」を反駁する批判者に対して、その数値の正しいことが言われるのである。

今ソノ法ヲ以テ算ヲ起シテ密合スレバ、何ゾコレヲ疑ハン。(201)

「正しさ」は数値の照合によつて確定されていくのである。このような「天文」を語る数値を所有しない和漢の天文言説は、「測定」の不在によつてその「正しさ」は西洋天文の言説と比較して確証しえないものとうつる。

歳差ハ地軸ノ変動ニ生ジ、地軸ノ変動ハ地球ノ南北ニ偏ナルニ生ズトシ、地球ノ偏ナルハ亦回転ノ勢ヨ

リ生ズ「トス」。コレヲノ測術ソノ精密ヲシルベシ。楚・漢・我ノ及ブ所ニアラザルナリ。(207)

そして逆に、西洋天文学の「測術の精密さ」は、太陽系の秩序だった惑星運行において「真理」とさえみなされるのである。

五星・地球本天一周ノ方数トソノ太陽ヲハナルル立法数ト相比例スルコトヲ得ン。コレモ亦一説ナリトカ。実ニ真理ヲ得タリトセンカ。(207)

この記述が『曆象考成後編』に書かれたケプラーの第三法則(公転周期の二乗と太陽からの距離の三乗との比は、すべての惑星に対して同一である)への言及であることは明らかである。従来のケプラーの法則と麻田剛立については、深い共通性があることが指摘されてきた(中山茂、海老沢有道、藪内清、荒木俊馬などの論稿)が、問題はむしろ複雑な数値による測定と照合からなる天文言説が「真理」として見いだされていることであろう。

以上見てきたように、『夢ノ代』テキストに関する限りにおいて、「地動説」に代表される西洋天文学に発見されたものは、五行概念による占い・折禱と直結した観念的な天文言説ではなく、数量化された空間と数値によつて認識される天文言説であった。そこでは、認識の「正しさ」

はなによりもまず、「視覚的明証性」と「算術・公式による計測」に支えられ、「天体望遠鏡・望遠鏡・分度器」といった計測器具を媒介にして数値の照合が行われていた。

第三節 「不測・不可尽窮」なる（他者）としての「自然」

以上見てきたのは、主として肯定的に受け入れられた西洋天文学の側面であった。しかしながら、西洋天文学が受容・解釈される過程で様々なズレが生じていたのは明らかである。従来とくに言われてきたのは、近代科学の認識論を高く評価する一方で、やはり陰陽五行概念に象徴される儒家的な側面が依然として残ったのはなぜか、という問題であった。いいかえるならば、近代合理主義の隠蔽の対象である「非合理」な思考が「近代性」の萌芽を明示する一八世紀後期から一九世紀にかけてのテキストに残るのはなぜかという「矛盾」についての疑問である。『夢ノ代』についての従来の研究に限ってみれば、それは次のような様相をみせる。たとえば、有坂（『地動説伝来と新宇宙論の出現』）は、蟠桃の「大宇宙論」を「蟠桃の真の結論」（296）としてその獨創性を指摘して、「蟠桃の

宇宙論は……志筑に比しても合理的」（300）であるとして評価する。またその一方で末中（『夢ノ代』〔著作〕）は、獨創的な宇宙論を認めながらも、麻田天文学の同志である高橋至時・間重富らの『曆象考成後編』に依拠した（実測）天文学と比して近代性の希薄な（不測）天文学であったとする。このように、『夢ノ代』に限ってみても、西洋天文学とはズレていく側面はあくまでも「非合理」（このでいう非合理とは主として陰陽の気や五行概念といった観念的な側面であり、宇宙の不可思議性への言及である）なものとして捉えられ、「合理性」の背後に抑圧されてしまいかである。そして、このような合理と非合理との「矛盾」はせいぜい「科学的研究を可能ならしめるような社会的地盤」（三枝博音『曆象新書』解題、日本哲学思想全書第六巻）に還元されてしまうであろう。

しかしながら、『夢ノ代』における「非合理」な側面は多く『曆象新書』におっており、またそれは合理主義の典型ともいわれる司馬江漢の『和蘭天説』（1736、寛政八年）、『刻白爾天文圖解』（1808、文化五年）、『天地理譚』（1816、文化一三年）などにも見られる。とすれば、近代の視線から「非合理」なるものとして見られるそれらの側面は近

代合理主義から見て単に隠蔽し抑圧すべき対象と規定すべきではない。むしろそういった「非合理」な要素が、『曆象新書』『夢ノ代』といった西洋科学の知識を満載したテキストに記述されたことの意味を考察すべきであろう。

(1) 〈不測・神変不測無窮〉なる天地という認識の前提

『夢ノ代』テキストの天文に関する記述を見ると、西洋天文学の正しさが評価される一方で、なおかつ陰陽概念による説明や神秘的な側面を多分に含んでいることがわかる。そして、その箇所は多く『曆象新書』からの引用から成っている。とりわけ、29・30・31条はほぼそのまま『曆象新書』から引用されており、しかもこの箇所は三枝博音によれば、「東洋流の形而上学から解放されて」（『日本哲学全書』、六巻、13頁）おらず、「科学思想とその時代の支配的道德との葛藤」（同、11頁）の現れであるといわれる。しかしながら、『曆象新書』の記述を見れば明らかかなように、そこにはまぎれもなく西洋天文学に対する深く正確な理解がある。したがって問題はそのような西洋天文学への深い理解を示しながらも、なおかつ神秘的な思考を保持し続ける「知」のありようである。『天文義論』『乾坤辨

説』にはじまる西洋天文学に対して発せられた陰陽概念に基づく言説の系譜上に、『曆象新書』および『夢ノ代』があるとすれば、それらはいかなる知的基盤を共有しているのであろうか。

『夢ノ代』『曆象新書』に限って検討することにする。

(2) 〈不測〉としての天文

『夢ノ代』に書かれた『曆象新書』からの引用をみると、主としてコペルニクスの「地動説」とニュートンの「引力」が重視されている。しかしながら、それは〈真理〉としての「地動説」や「引力論」を発見したためではない。いかにえるならば、それら科学的な発見が認識の究極点であり、それに到達しえたからこそ西洋天文学が優れているというわけではない。むしろ、そのような西洋天文学の発見によって、ますます「天」の不可思議さが確認されるからこそ、既存の仏教的・国学的・儒学的宇宙論と比較してより優れた認識論として評価されているのである。一八・一九世紀の日本においては西洋天文学は「天」の不可思議さを確認する、手だてとして見いだされているのである。

太陽二時申テ論ズレバ、地球ノ動カズシテアランヤハ。且ソノ説奇怪ナルニ似タレドモ、コレニヨリ

テイヨイヨカノ上天ノ妙用、神変不測無窮ナルコト
ヲ尊信スルニ足ルベケレバ、地球ノ全体不動ナリト
ノミハ云ベカラズ。(210)

ここでは、「上天の妙用、神変不測無窮」といつた、宇宙の「不測性」が天文認識の前提となつてゐることがわかる。それはまた「引力」の条ではさらに強調される。『曆象新書』から引かれた「引力」の記述は、『夢ノ代』ではとくに重視されており、「奇ナルカナ西洋ノ説ヤ。天地ノ大輪ココニツクス。アア、梵・漢・我邦管見及フ処ニアラザルナリ。」(213)といわれるほどである。具体的にその記述をしてみる、

天地ノコトハ、スベテ引力ニカカレリ。ソノ引力モ
元来造化不測ノ裏ヨリ出タリトイヘドモ、弁ジテシ
ルベキコトナレバ、不測中ノ不測ニアラザルナリ。

(213)

これは『曆象新書中編付録』の「不測」の条をほぼそのまま引用した箇所である。原文では、「引力」以外に靈妙不測なものはないかという質問に答えて、「引力の引力たる所以の者、是れ則ち靈妙なり、是れ則ち不測なり」(213)といわれる。すなわち、「不測」なる「所以」から発した「引力」は認識可能であるが、その「所以」は認識不可能

なものとして認識対象の外部に置かれるのである。そしてこの「不測」は「引力」に限らず、「凡ソ天上天下スベテ不測ニ非ハナシ」(214)としたうえで、次のように言われる。

タレカ宇宙ヲ建立シ、誰カ元氣ヲ造製セル。タレカ
天地ヲ生ジ、常動常静ノ規ヲ定メ、引力強弱ノ矩ヲ
定メテ、大小ノ諸曜ヲ網維推行スル。タレカ引力ヲ
作テ、元氣ヲシテ屈伸変化セシメテ、合織シテ水・火
トナシ、又其五行ヲ合織シテ物ヲ生ジ、人ヲ生ジ、
眼・耳・鼻・舌ヲ造リ、五臟六ヲ營シ、精神・性情・
魂魄ヲアタヘテ、視聽・言動・思慮・分別シテ、天地
ノ道理ヲ弁ゼシムル。弁ズル処ノモノモ不測ナリ。弁
ズルユエンノモノ亦不測ナリ。不測ヲ以テ不測ニ合
テ、亦イヨイヨ不測ナリ。(214)

ここにあるのは、この宇宙の存在の不可思議としか言いよ
うのない状態への言及である。しかも、この宇宙の不可思
議さは、従来の仏教的・国学的宇宙観の内部で言われてい
た不可思議さとは位相を異にするもののように思われる。
すくなくともそこには西洋天文学による言説が介在してい
る。従来の認識の枠組みからいったん外部に出て、改めて
発見された不可思議さである。くりかえすならば、「不

測」とは、合理主義の対立物としての非合理的な物ではない。そのような二項対立的に設定されるものではない。(不測)とは、それを認識の外部に置くことではじめて認識が可能となるような認識不可能性である。『夢ノ代』正確に言えば『曆象新書』で言及される(不測)とは、西洋天文学によってよりその不可思議さがあらわにされるのであり、蘭学とは異なり、西洋の言説を相対的に受け止める認識論的基盤であるとも言い得るのである。

(3) 太陽への言及

『夢ノ代』テキストで強調される「地動説」(25、35条)は、従来の天動説の宇宙論的パラダイムを転倒したものである。この地球のみならず他の諸惑星もまた太陽の周囲を公転するといった認識は強烈なインパクトを同時代の知的空間に与えている。「奇ナルカナ西洋ノ説ヤ。天地ノ大輪ココニツクス」(25)という記述からも、そのことは明白である。しかしながら、この「地動説」の説明原理としての「引力論」は、あくまでも「造化不測・神妙不測・靈妙不測」なるありかたに規定されており、『夢ノ代』『曆象新書』の視線は「引力論」を背後で規定するこの不可思議さに注がれているのである。そして、その不可思議さの根

源が、神・太陽ではなく「太陽」に置かれることは注目すべき問題をはらんでいる。先に引いた『曆象新書中編付録』の「不測」の条の記述は興味深いものである。

人ノ靈妙不測ノ神ハ在ラズト云処ナクシテ、シカモ必ズ心ヲ以テ都トス。天ノ靈妙不測ノ神モ在ラズト云コトナクシテ、即チ太陽ヲ以テ都トス。……天地造化ノ妙用ハ悉ク太陽ヨリ出ズ。コノユエニヨクソノ身ヲ修メテ、ヨク其父ニ孝アリ、ソノ君ニツカエテ、神妙不測ノ天命ヲ畏レ慎ム「トキ」ハ、我心ヲ以テ太陽心に冥合ス。コレソ宇宙ノ至尊ニ奉ズル処ナルベシ。(25)

この記述から、太陽が「天地造化の妙用」の根源とされ、やや理解不可能ともいえる天人ならぬ「太陽・人合一」が語られていることがわかる。この記述を「敬天思想」の現れだとしたのは、三枝博音(日本哲学全書、六巻、解題、11頁)である。とはいえ、そこに「地動説」が介在している以上、既存の「天」観との差異は明らかである。むしろ問題は、「地動説」を通じて「太陽」へと注がれた新たな視線である。『夢ノ代』の31、35条に書かれた「独創的な宇宙論(有坂)といわれた「大極恒星各明界之圖」では、暗界と明界とに分節化して大宇宙論が展開されるが、そ

の言説の基底にあるのは、「光明・引力」の発現地としての「太陽」であり、その「光と引力」とによってあらゆる生成運動が可能になるといふ。

地・月・五星ソノ余ミナ陰ニシテ独立セズ。太陽ニ蒸シ立ラレテ湿気ヲヲビ、陰陽和合シ其生ヲ遂ルナリ。

……頼ミ憑ルモノハ唯一太陽ノミ。(181)

太陽ノ光明ヲ受テ和合セザルコトナカルベキヤ。ステニ和合スレバ水火行ハレテ、草木ノ生ゼザルコトナシ。又虫ハ本ヨリ生ズベシ。虫アレバ魚貝・禽獸ナキコトアタハズ。シカラバ則、何ゾ人民ナカラシ。ユヘニ諸星ミナ人民アリトスルモノ、我ノ有ヲ以テ充・推窮スルモノナレバ、妄ニ似テ妄ニアラズ。虚ニ似テ虚ニアラズ。仏家・神道ノゴトク無稽ノ論ニアラザルナリ。(222)

「太陽」中心の「地動説」に基づく想像的な大宇宙論が「虚妄」でない根拠としてあげられるのは、「太陽」の「光明」によって今実際に「有」なる存在としてある生物である。すなわち、究極的には「不測」であり、「冥合」という形でしか触れえない「太陽」に発する「天地造化の妙用」によって「実存」する物が、「虚妄」でない根拠となるのである。このように、「太陽」は究極的には認識不可能とい

う（不測）性を付与されながらも、仏教的・国学的な宇宙論とは異なり、「実存」する存在物の根源として構成されているのである。

第二章 「地理」の言説

『夢ノ代』「地理編」の記述を検討する前に、近代が見いだした近世地理の位相、あるいは近世地理テキストに注がれた近代の視線についてふれておく。基本的に見て従来のほとんど全ての研究は、近世日本社会Ⅱ鎖国体制の中に近代西洋科学の萌芽としての地理的言説、具体的に言えば、近代へと至る重要な要素としての世界認識を包含するテキストを過大に評価している。たとえば近世日本の地理的テキストとして、西川如見・新井白石に始まる世界地理、国内を対象とした風土記類、自国中心的で観念的な水士論、その他辞書の「天文地理」という項目で書かれた記述などがあげられるが、この中で特に高い評価を与えられているのが、「世界地理」を記述の対象としたテキストというわけである。そして、『夢ノ代』テキストの地理的記述もまたこのコンテキストの中で評価されてきたことは言うまでもない。

最初の本格的な蟠桃論として書かれた亀田次郎の『山片蟠桃』(1943、全国書房)の中でも世界地理の記述は特に重視されている。その中で、亀田は(1)近世日本Ⅱ鎖国体制(2)幕末における対外圧力Ⅱ西洋諸国の植民地政策への対応という問題を設定し、とりわけ(2)の対外圧力に対抗するための、「世界地理」への志向として蟠桃の「地理」記述を扱っている。つまり、鎖国体制下における蟠桃の世界地理への言及は、鎖国を超越する「世界地理」への志向においてはではなく、「鎖国体制」を破壊せんとする「西洋列強」Ⅱ(他者)を認識する手だてとして「世界地理」を書いた点において評価されているのである。

国防的見地から、世界地理的論述を行つてゐる所は、決して吾々は見逃してはならないのである。(122)

現時の大東亜共栄圏の抱負、方針を、百年以前に翁が保持してゐた事がわかる。實に其先見の明に驚くのである。(118)

しかしながらこのような解釈が、亀田をとりまく戦時下の言説に規定されていたことは言うまでもない。こういった解釈は、同時代の鮎沢信太郎『地理学史の研究』『鎖国時代の世界地理学』『大日本海』、あるいは藤田元春『日本地

理学史』などのテキストに共有されており、鎖国時代における世界地理記述はその「普遍性・近代性」と同時に、国防論あるいは国体の再認識の方便という二面性において捉えられているのである。

しかしながら、戦後の研究においては後者の側面は「国体・国防」のニュアンスが排除されて、もっぱら対外危機意識という意味で定説化したのが、その一方で前者は、とくに「蘭学史・実学史・科学史」といった領域で戦前以上に強調されるようになった。たとえば、辻田右左男『日本近世の地理学』は、『夢ノ代』を「近代合理主義が抬頭し、科学的な認識方法が用いられている」(250)テキストと見なし、結論として「厳正な科学的合理主義と世界地理的知識が結合して『夢ノ代』が生まれたということができ、蟠桃においては地理学がかれの全思想の基盤をなしていた」(253)という。また、蟠桃の地理思想それ自体を主題としたものに、小野菊雄「近世日本地理学の性格と現代への意義——山片蟠桃・司馬江漢を中心として」(『史林』44、3)がある。しかしながら、小野の視線は『夢ノ代』が書かれた「啓蒙的な意図・動機」や「近代科学の精神」と鎖国体制の「現状維持論」が矛盾的に共存した蟠桃像に注がれており、『夢ノ代』「地理編」の記述それ自体に読み取りう

る知のありようは一切問題とされてはいない。基本的に『夢ノ代』『地理編』の記述をめぐっては、鎖国体制下の世界への認識（近代合理主義・普遍主義への志向）という側面と対外危機意識にとらわれた鎖国擁護論（反動主義・保守主義）といった「矛盾性」が問題にされているとみてよい。そしてこれが、亀田次郎以降、比較的まとまった末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢ノ代」篇』をへて、最近の研究にまで継承されている問題設定の枠組みであることはいうまでもない。

したがって、『夢ノ代』『地理編』の記述においても、「天文編」と同様に、いかなる認識論的な転換がなされているかを検討しなければならぬ。とりわけ、「地理」は「天文」における知的転換と密接に関連している。従来の地理空間の認識様式はいかなる形で批判され、新たに設定される枠組みはいかなるものであるか。すなわち、「地理編」の記述を通して、一八世紀から一九世紀にかけての知的転換のありようを問題にしなければならない。

第一節 〈妄説〉としての和漢地理——「虚妄」な地理記述

「地理編」においては、「天文編」とは異なり、「天道説」といった宇宙論ではなく、「地球」内部の空間が知の対象とされる。そこで前提にされるのは、「渾天説」ではなく、地動説と結び付いた「地球説」（池本球なり。223）である。これは4条の付図、「地球凸凹柚ノゴトキ圖」（215）や司馬江漢の「銅版世界図」、橋本宗吉の「新訳地球全図」（260）への言及から明白である。このことから、『夢ノ代』『地理編』では、地理空間は「地球」という空間認識を前提として言及されることがわかる。この「地球」という空間認識が西洋の「航海・通商」による（実見・経験）に基づいて構築されたことはいうまでもない。『夢ノ代』のみならず、同時代の西洋地理（言及したほとんどのテキスト）とくに司馬江漢のテキスト）が、西洋の世界地理知識が「航海」の経験から生じたものであることを強調しているのである。いずれにせよ、このような認識によれば、観念的で自己・自国中心的な地理記述が否定されることは明らかであろう。

一読すればわかるように、「地理編」では既存の和漢の地理テキストのほとんど（事実を記した志類、記録のテキストを除く）が「妄説・虚妄」として否定されている。その典型が『山海経』である（2・19条）。従来の日本認識

としての「扶桑国・君子国」(223)という規定もまたこの『山海経』からきており、このテキストへの批判は同時に、一八世紀を通じて常識化した日本認識の解体でもある。いかにテキスト批判がなされているか、そのありようを見てみる。

彼ノ書ハミナ伝聞ノ訛リ、虚妄ノミ。ミナ虚説ナリ。
ソノ虚説ヲ以テ我ノ実事ニアテテ、扶桑国ハ我国風
土ト異ナレバ、日本ニアラズト云ガゴトシ。ソノ説
トコロミナ訛妄ノ説ナリ……後儒只漢人ノ書ヲ信ズ。
ユエニカクノゴトシ。ソノ云処ノ説ミナ実ニアラズ。
(223)

『山海経』などのテキストが「虚妄・虚説」であるのは、それが「伝聞」によつており、「実」ではないからである。ここでは「伝聞」が「虚」であるとされている。しかも、「伝聞」からなるテキストを信じてさらに言説を展開することが拒否されるのである。このように「伝聞」からなるテキストを信じることは、19条では「実ニ兒女ノ淨瑠璃ヲ信ズル」(260)ことに譬えられさえする。しかしながらまた、「実」を経験した記述でさえも否定されることになる。

漢ノ張騫、西域ニ通ジテ見ル処ノ国々ハ、実ニ蹈ム

処也トイヘドモ亦杜撰多シ。況ヤ山海経ノ如キ、一
モ取処ナキヲヤ。(260)

「実」に見てもやはり「杜撰」が多いという。それは「実」なる物を見るときに「虚」なる物が混在せざるをえないような見方を指摘しているのであり、ましてや「虚妄」でしかない『山海経』は「虚」なる物の充満したテキストであると見なされることになる(ミナ其人物鳥獸ノ異形)。このような『山海経』テキスト批判を見れば、『夢ノ代』がいかなる知的基盤に支えられているかがわかる。すなわち、「実」なる物を「虚」なる混在物を排除しつつ見る、あるいは「虚」なる混在物の網の目から「実」なる物をひきはがし、「実」それ自体を見ようとする認識の様式がそれである。そして、このことは西洋地理の評価の言辭からも明らかに読み取られうるものである。

第二節(実地)の西洋地理——「正しい」地理記述

(1) (実地)による地理記述

『夢ノ代』『地理編』では、地理記述が「伝聞」ではなく、「実地」によつてなされるという西洋地理の言説が発見されていることは明白である。

夫西洋ノ諸国、梵天・和・漢ノ文旨ト違ヒ、又杜撰・妄説・詐欺ヲ禁ジ、実地ヲ蹈ザレバ書スコトナシ。ユ
ヘニ此学ヲ以テ正トスベシ。(360)

和漢と西洋との地理言説における絶対的な差異は、〈実地〉の有無である。そして〈実地〉こそが「正しさ」＝真理性を保証するものとして認識の核心に設定されるのである。

このように、〈実地〉に見る物が「正しい」とする言説は、和漢の既存のタブローによる「天地」の認識様式を解体して、「地球」という地理空間(経緯線で分節化され、万国によって仕切られた)へのまなざしを可能にした。そこでは「伝聞」はすべて「虚妄」として認識の外部へと排除され、ただ「実」なる物に視線が注がれる。そのような言説として西洋地理言説が発見され、解釈されていることに注目すべきである。

したがって、一八世紀初頭の西川如見や新井白石による西洋の知への評価、すなわち「所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず」(『西洋紀聞』岩波文庫、24頁)といった二重構造的な評価は『夢ノ代』『地理編』の記述には見られない。むしろ、『夢ノ代』『地理編』で書かれるのは、京都の町中、歴史的遺跡、大井川、浅間山などの火山噴火、無人島の発見、海底

地形などの「形而下」の物に限定されており、「形而上」なる物への視線は隠蔽されていることがわかる。『夢ノ代』『地理編』では、西洋の地理記述が形而上性に欠けるとする批判は、植民地政策という政治的〈実態〉への批判(20・21・22)に取って代えられているのである。

(2) 命名作業としての地理認識——同定という認識

従来の「天動説・渾天説」という宇宙論・世界観が「地動説・地球説」というそれへと劇的に転換した一八世紀後期から一九世紀前期にかけて、〈実地・実見〉という認識様式は圧倒的な力として知的空間へと展開していく。『夢ノ代』『地理編』、もまたその典型である。しかしながら、専門化した近代地理学とは異なり、一八世紀の西洋地理学は「地球」という空間、とりわけ未知なる地理空間を視線の主たる対象としていたのであり、そこでの地理学の役割は自己の言語によって空間を分節化することであった。つまり、自己の言語体系の中に地理空間をとりこむことが地理認識であった。したがって、絶え間無く未分化な地理空間を分節化すること、すなわち不断な命名作業が地理認識の中心に位置付けられることになる。『夢ノ代』

「地理編」で言及されている西洋地理学とは、そのような命名の地理言説である。

西洋人天下ヲ巡リテ、見出ス処ノ大洲ニツ。曰、亜細亞州、曰、歐羅巴州、曰、亜佛利加、曰、墨瓦羅爾加州（メカラニカ）。是ヲ五大洲ト云ナリ。ミナ西洋人ノ見出ス処シテ、五大洲トスルモ、又国々ノ名ヲ付ルモ、ミナソノ命ズル処ナリ。ユヘニ天竺トイヘドモ、漢土トイヘドモ、我日本トイヘドモ、ミナコレ西洋人ニ名ツケラレテ、印度トシ、支那トシ、「ヤーパン」トス。恥ベキニアラズヤ。……ソレソレニ命ズルコト、ホトシド天帝ノ命ノゴトシ。シカレバ「エウロツハ」人は宇宙ノ柄ヲニギルコトカクノゴトシ。ミナコノ命名、地名ヲ「エウロツハ」人ノ正サルルモノ、如何トモスベカラズ。（253-254）

西洋の視線によって発見された地理的空間は、同時に西洋の言語によって命名される。西洋の地理学が和漢のそれと比較して圧倒的に優越しているのは、その持ち前の言語による命名の量的な比較においてのことである。「航海術」が発達し「天下を巡」る西洋の視線は、「地球」上を往来して、空間を名付け、自己の言語体系の内部へと地理的空間を取り込んでいく。このような「航海術」に優る西洋

の命名作業は、あたかも「天帝ノ命」のようである。すなわち、西洋の命名作業の視線は「主体」的なものであり、和漢の地理空間はその視線の「客体」であるしかない。このように見ても「地動説・地球説」という空間認識に基づく一八世紀から一九世紀にかけての地理学的言説が、自己の言語体系へと未分化な地理空間を内部化していくという命名行為を主としたものであることがわかる。

シカレドモ天下万国ヲ巡リ通商シテ、天文・地理ヲ明ラメ、地球ヲ図シテ限界ヲ定メテ、他ノ国・ヲ以テ我ヨリ名ヲ命ズトイヘドモ、ソレゾレノ国主ニ謀リテ名ヲ命ズルニアラズ。唯ソノ国ノ目印・符牒ニ付来リシモノナリ。……西洋人ノ自国ニテ図シテ、ソレゾレノ仮ニ名付ヲキシモ、ゼンゼンニ用ヒ来リテ、ツイニソノ名ヲ用ヒザル能ハザルヤウニナリタリ。シカレバ則チ、諸国此名ツケラレタル名ヲ用ヒテ、用弁セザルコトアタハズ。（254）

西洋の「地球」の命名行為とその分節化は、あくまでも「航海」の「目印・符牒」として仮説的になされたものである。しかしながら、それら「目印・符牒」として使用されてきた名称が常識になり、さしあたつてはそれを踏襲するといわれるのである。このような記述からも、『夢ノ

代』「地理編」で発見されている西洋地理の言説の位相が浮き彫りになる。和漢とは異なり、「通商」によって「地球」という球体空間を往来する西洋の知にとつては、地理空間を命名行為によって分節化し、「航海」の「目印・符牒」として仮説的に地理空間を名付けることが必要であつたわけである。

結語

以上、『夢ノ代』「天文編・地理編」の記述を検討してみた。その検討によつて明らかとなつたのは、主として以下の三点である。(1) 従来の和漢の「天文地理」の記述は「虚妄・虚説」として否定されていること。(2) 西洋の「天文地理」の言説が「正しさ・実用性」を保有するものとして、その和漢の言説にたいする優越性が強調されること。(3) 西洋の「天文地理」言説の優越性が認められつつも、それによつてさえ認識されえない「天地自然」の「不測」性 \parallel 不可思議性が認識の前提として設定されていること。従来の研究が(1)と(2)とから『夢ノ代』テキストの有する「近代的合理主義・経験的科学性」を結論として導きだしてきたことは改めて言うまでもない。しかしな

がら、『夢ノ代』テキストの記述を「合理主義」と安易に連想する解釈は、(2)の西洋「天文地理」の「正しさ」がいかなる問題様式によつて構成されたものかを不問に付し、自明の前提として無条件に解釈の前提にしてきたように思われる。と同時に、(1)の西洋的な知性によつて否定されるべき、「非合理」な物(陰陽、五行概念、天地万物の不測性、不可思議性)は、「合理主義」から見れば抑圧・隠蔽すべきものとして、その否定性においてのみ見られてきたのである。したがつて、そのような視線には、(3)の側面の有する思想的な意味は問題化されず、西洋的知性とのズレは結局従来のステレオタイプ化された解釈に困り込まれてしまう。それは、「儒教性・神秘性」であり、また「東洋道徳・西洋芸術」というテーゼに典型的な近世日本知識人に一般的であつたとされる思想の二重構造である。しかしながら、一八世紀後期から一九世紀にかけての西洋的知の受容・解釈過程において、近世儒教的知の内部にあつた知性が(他者)としての西洋的知性を解釈するときに思想的問題として立ち現れたものが一体何であつたかは様々な知的領域(とりわけ医学の領域)において再検討すべき問題としてあるように思われる。